

◇インクルーシブ教育について

問1. 神戸

私からはインクルーシブ教育についてお尋ねします。先日、「障害者が普通学級で学ぶ『壁』をなくして、日本で進めぬ『インクルーシブ教育』」という記事を見ました。さらに国連の障害者権利委員会が、障害者権利条約に基づき、日本政府に対して障害者を分離した特別支援教育の中止などを求める勧告が発表されました。障害のある児童生徒とそうでない児童生徒が、ともに学ぶ仕組みであるインクルーシブ教育は大変重要なことであり、実際、私が経営する幼稚園でも以前、障害のある園児を受け入れたことがあります。こうして、小さいうちから接することで、当たり前のようにインクルーシブ教育の考え方を実現できることは、とてもよい事であると思う一方、受け入れる現場の指導者や教育現場の戸惑いも経験しました。

現在、日本で行われている特別支援教育は、障害のある子供ひとりひとりの発達や教育的ニーズに応じた支援を行っており、それを求める保護者もいます。そういったニーズがある中、国連の勧告を受け、今後の日本の進むべき姿については注視すべきだと思いますし、記事でも述べられておりますが、少子化で子供の数は減少しているなか、特別支援教育を受ける子供は増えています。そこでお伺いします。

- (1) インクルーシブ教育システムが推進される中、小中学校において障害のある児童生徒の増加や障害の多様化が見られますが、現在、地域の小中学校において、特別支援学校の就学基準に該当する児童生徒が、どのくらい就学されているのかお尋ねします。

答え1. 答弁者(特別支援教育課長)

特別支援学校の就学基準については、視覚障害、聴覚障害など、障害種に応じて学校教育法で示されているところではありますが、令和4年5月1日現在、その基準に該当し、地域の小中学校に就学している児童生徒は、名古屋市を除いて、1, 518人で、5年前の約1. 6倍となっております。在籍する学級は、通常の学級に84人、特別支援学級に1, 434人です。

問2. 神戸

小中学校の通常の学級で、障害のある児童生徒がそれだけの数がある中で、

インクルーシブ教育を進めておられることは意義深いと思いますが、様々な問題もあると思います。そこでお尋ねします。

(2) インクルーシブ教育を推進するために、現在課題となっていることはどのようなことでしょうか。

答え2. 答弁者(特別支援教育課長)

地域の小中学校においてインクルーシブ教育を推進する上で課題となるのは、次の3点であると考えております。

1点目として、学校教育の関係者が、保護者の考え方と障害の内容や程度を理解し、子供の教育的ニーズに応じた支援体制を入学までに整えることが重要であります。そのためには、就学前年の夏頃までに保護者と学校教育の関係者が相談できる機会を十分に設け、気軽に利用していただけるようにする必要があります。とと考えております。

2点目として、全ての小中学校の教員が、発達障害を含め、障害の特性を踏まえた対応や学級経営、授業づくりについて研鑽を積み、資質・能力の向上を図っていくことが必要であると考えております。

3点目として、小中学校に配置している特別支援教育支援員や看護師をさらに拡充すること、また、施設設備のバリアフリー化を進めることが必要であるとと考えております。

問3. 神戸

障害のある児童生徒さんの保護者の方が、最初は特別支援学級に通わせたが、他の児童が「障害児だ。」と呼んだことで、「欧米のように健常児と一緒に遊ばないと、障害児は自分たちとは違う人とみなされ、差別の温床になる。」と思い、お子さんを普通学級に移したとおっしゃいました。しかし、養護教諭との面談で「厳しい訓練で、ちゃんとしつけがされる特別支援学級に行くべきだった。」と言われ、壁を感じ悩んでいるとのこと。理想的な教育を進めるには、日本の現状ではまだまだ壁があるように思います。そこでお尋ねします。

(3) 今後インクルーシブ教育を推進するために、どのように取り組んでいかれるつもりなのかお聞かせください。

答え3. 答弁者(特別支援教育課長)

今後インクルーシブ教育を推進するにあたっては、まずは、障害のある子供の保護者が、身近な場所で、子供の就学について早い段階から学校教育の関係

者と相談することができるよう、早期教育相談の機会を増やしてまいります。

また、小中学校の全ての教員が、障害のある子供に対する理解や支援の方法等について、必要に応じた内容を学ぶことができるよう、オンデマンド型の研修も取り入れながら、研修の機会を充実してまいります。

こうした研修をする際には、障害のある子供がどのような配慮を受けて学校生活を送っているかを県教育委員会でまとめた後、Webページで公開する予定の事例集を活用していただきたいと考えております。さらに、人的配置や施設設備等の教育環境の充実については、財政措置の拡充を引き続き国に要請をしております。

こうした取組を通して、障害のある子供一人一人の教育的ニーズに的確に応えることができる支援体制を整備し、地域の小中学校で学ぶことができるよう、今後ともインクルーシブ教育を着実に進めてまいります。

要望:神戸

最期に要望させていただきます。我が園で、障害のあるお子さんを受け入れたのは、お母様があちこちの園を訪ねたのですが、全部断られてうちの園におみえになったからです。知的には問題がなかったのですが、全く歩けないお子さんで、園内では這って移動し、運動場では歩行器を使って生活しました。私は園生活ができるかどうか、そのお子さんが通っている主治医をたずねて京都まで行き、「受け入れるためにはどうしたらよいですか。」と尋ねると、そのお医者様が一言、「特別なことは何もしなくていい。他のお子さんと同じように扱えばいいのです。」とおっしゃったのです。目から鱗でした。

ハンディはつけましたが、運動会でリレーにも参加し、遊戯会では椅子に座って劇あそびにも参加しました。他の園児たちは障害など全く気にせず、そのお子さんを受け入れ、ごく自然にその子をサポートしていたのです。それは園生活を共に過ごしたからこそ、特別意識はなくできたのです。そのクラスの子どもたちは将来、大人になった時に障害があるからといって、その方たちを特別な目で見ないでしょう。だからこそ、一緒のクラスで活動し、生活することが重要な意味を持ち、差別のない社会につながっていくと思います。

障害の状況により、個別の支援や自立を目指して特別支援学級を選ぶ人もみえるし、普通学級を希望される方もみえると思います。インクルーシブ教育のニーズはますます高まっていくでしょうし、それぞれのニーズに答えていく必要があります。教育現場や保護者の声に耳を傾け、障害のある子もない子も学べる環境づくりを推進していくことを要望して、質問を終わります。